

インドの「独立戦争」

特許審査第四部長 櫻井 孝

インドに「First War of Independence」という言葉がある。これを邦訳したのだらうと思うのだが、複数の日本語文献等で「第一次独立戦争」という言葉を目にした。インドは、第二次世界大戦後の1947年8月15日に独立している。それ以前はイギリス領インド帝国として、イギリス国王がインドの皇帝を兼任していたのであるが、さて、その独立に際して、「独立戦争」はあったのだろうか。浅学の自分にはどうにもよくわからない。「First War of Independence」とは、後に述べるように「セポイの反乱」のことを指している。従って、インドの独立に向けた動きを考える時、ムガル帝国や東インド会社の時代にまで話を遡らせることが必要となる。

インドにおけるムガル帝国の成立は1526年、他方でイギリス東インド会社の設立は1600年のことだ。東インド会社は最初は交易会社であったが、その後、徐々にイギリスによる植民地支配の拠点としての機能を持つように性格が変容する。18世紀から19世紀にかけて、ムガル帝国は衰退の一途をたどり、他方で東インド会社はどんどん勢力を伸ばして実質的にインドを支配するようになった。そんな状況の中で1857年に勃発したのが「セポイの反乱」である。

「セポイ」とは東インド会社に雇われていたインド人の傭兵である。この反乱のきっかけは、セポイに装備品として新たに配給されることになったエンフィールド銃にある。エンフィールド銃は弾丸と火薬が一体となったカートリッジを使用するもので、このカートリッジの端を歯で噛み切って銃口側から装填する仕組みとなっている。このカートリッジの外包紙には防湿効果を持たせるために獣脂が塗られていた。問題はこの獣脂の存在である。豚脂ならばイスラム教徒が、牛脂であればヒンズー教徒が、それぞれ宗教上の理由で口にすることはできない。セポイの中で新しい銃の受け取りを拒否する者が現れ、それを抑えつけようとしたイギリス軍人に対して武装蜂

起が起こり、やがてはインド全土に影響する大反乱に発展する。傭兵の身でありながら最初に新銃を受け取るなど声を挙げた男は、マンガル・パーンデだ。彼の肖像は、1984年に「India's Struggle for Freedom (自由のためのインドの戦い)」シリーズの記念切手の1枚に取り上げられた【図1】。

ここで注目したいのは、この切手シリーズのテーマが「India's Struggle for Freedom」であることである。「War of Independence」ではない。さらに、この切手に関してインド人の著した解説を見ると、1857年の「mutiny (反乱)」において新銃の受け取りを拒否した男、と記されている。「反乱(mutiny)」という言葉は、これはイギリス側の視点で事件を捉えた言葉である。インド人側から見たときには、「反乱」ではないはずだ。実際に、インド独立後になってインド人としてのアイデンティティが高まってくると、インド人の中にはこの「セポイの反乱」をインド人側の視点で捉えて、「War of Independence」とか「First War of Independence」と呼ぶ人も現れていたそう。しかし、少なくとも郵便切手の世界においては、1984年にはまだセポイの反乱が「(First) War of Independence」であるというまでには至っていない。

なお、セポイの反乱が最初にインドの記念切手に取り上げられたのは、反乱勃発からちょうど百年経った1957年のことである。この年のインド独立記念日に、「Mutiny(反乱)」百周年記念として2種の記念切手が発行されている。ここでも、反乱は反乱として扱われている【図2】。

ところが、1987年あたりから、どうもその扱いが変わってきたように見える。セポイの反乱の際には、叛逆した傭兵をみせしめのためにけっこう残酷な方法で処刑する



【図1】マンガル・パーンデ。1984年5月10日に発行された「India's Struggle for Freedom」第2シリーズの1種(ギボンズ#1124)。



【図2】1957年8月15日発行のインド大反乱百周年記念切手2種のうちの1種(ギボンス#386)。



【図3】1987年12月10日発行のナラヤン・シン記念切手(ギボンス#1278)。

ことが行われた。大砲の前にくくりつけておいて弾をぶっ放すなどというのもあったそうで、実際にその様子を描いた記念切手が1987年の暮れに発行されている【図3】で、その切手の解説には「Patriot (愛国者)」「Martyr of the 1857 war of Independent (1857年独立戦争の犠牲者)」と書かれているのだ。ここでようやく「War of Independence」という言葉が出てきた。

さらに決定的なのは、翌1988年に発行された記念切手である。「Martyrs from First war of Independence (第一次独立戦争の犠牲者達)」とタイトルが付けられ、さらに切手の中に「FIRST WAR OF INDEPENDENCE 1857 (第一次独立戦争1857)」の文字が明記されたのである【図4】。1987年から1988年あたりにインドでどのような意識変革があったのかはわからない。わからないが、ようやくインド政府が公に「セポイの反乱」を「第一次独立戦争」と位置づけたのか、とも思える。もちろん、これは切手の世界で



【図4】1988年5月9日発行の最初の独立戦争の犠牲者達を追悼した記念切手(ギボンス#1311)。

さて、「第一次」があれば「第二次」はどうなんだと気になる。しかも、最初の疑問に戻って、実際にインド独立の際に「戦争」があったのかも気になる。たしかに、インド独立に向けてマハトマ・ガンジーを中心とした非暴力抵抗運動があったし、またチャンドラ・ボースが組織したインド国民軍の戦いもある。これらも各種記念切手の題材になっているが、「独立戦争」という扱いは、少なくとも切手の世界から見るとはなされていないようだ。こうしてみると、そもそも「First」を「第一次」と邦訳するところに違和感があって、軽く「最初の」とでもしてお

の話であって、アプローチを変えればまた別の話もあろう。しかし、インドの切手を通してインドの歴史に迫ろうという者にとっては、この変化はなかなか面白い。

いてくれれば誤解もないのに、などと、不肖にわかインド史研究家は考えてしまうのである。

インドの最初の郵便切手は、インド国内で印刷されて1854年10月に4種類の額面で発行されている。まだこの時点ではインドはイギリス領とはなっていなかったのだが、いずれの切手にもイギリスのビクトリア女王の肖像が描かれている【図5】。翌1855年10月からは、イギリスのトーマス・デ・ラ・ルー社で印刷された、より洗練された郵便切手が輸入され、販売・使用された。この1855年10月以降の郵便切手には、「EAST INDIA」の表示がなされている。当然のことながら、東インド会社によって統制されていることを示したものだ。それから2年も経たないうちにセポイの反乱が起きる。そしてこの大反乱の責任を取られる形で東インド会社によるインド支配は終止符を打ち、1874年に東インド会社は解散、1877年からイギリス政府による直接統治が始まるのである。

このようにインドにおいて郵便切手が発行され始めた時期は、まさにインドの歴史が大きく変わろうとしていた時期に当たる。手元に1855年4月2日の消印のある郵便封筒【図6】があるが、この封筒はまさにそのような時期を見てきたのかと思うと、感慨深いものがある。きれいな切手を単に収集するのももちろんいいが、切手や実際の郵便物からその国の歴史を勉強するのもまた楽しい。「郵趣」という言葉はまさに言い得て妙だと思う。



上：【図5】1854年10月1日インドで最初に発行された切手(田型：ギボンス#4)



下：【図6】1855年4月2日ヒマチャル・ブラデシュ州シムラからパンジャブ州ルディアナ宛て実郵便。貼られているのは1854年10月1日発行の切手(ギボンス#2)。

【参考文献】

- KNOW YOUR STAMPS, 1988
published by Dipak Chakravarty, Calcutta
- 多重都市デリー 荒松雄 中公新書 1993年11月25日発行
- インド大反乱一八五七年
長崎暢子 中公新書 昭和56年3月25日発行
- インド独立史
森本達雄 中公新書 昭和60年1月20日第7版発行